
Fate/Zero **最恐最悪のバーサーカー、襲来**

悪魔使い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / Z e r o 最恐最悪のバーサーカー、襲来

【Nコード】

N 7 9 5 3 Y

【作者名】

悪魔使い

【あらすじ】

聖杯戦争。

それは七人の魔術師と七体のサーヴァントによる悲惨な殺し合い。一人の少女を救い、ある男に復讐を誓った彼、間桐雁夜は一体のサーヴァントを召喚する。

しかしそれは地獄への幕開けだった。それは最恐にして最悪のバーサーカー。雁夜自身にも制御できない、おぞましい化け物だった。

それは別世界から召喚された

そんなサーヴァントが引き起こす、聖杯戦争の惨劇が、今、始まる。

バーサーカー、襲来

その夜、彼は己の命を賭してその儀式に行っていた。

薄暗い地下。そこはおぞましき場所。無数の醜悪な存在が跳梁跋扈した、彼にとつては、いや、まともな人間であれば誰であろうとも吐き気をもよおすであろう場所。

そんな場所で、彼はある儀式を行っていた。

サーヴァントと呼ばれる存在の召喚。

それは聖杯戦争と呼ばれる闘争の前準備であった。

七人の魔術師と七体のサーヴァントが最後の一組になるまで殺しあう、血みどろの争い。

勝者に与えられるのは聖杯と呼ばれるどんな願いもかなえてくれるとされる願望機。

間桐雁夜はそれを得るためにこの争いに参加した。

もつとも、彼がこの争いに参加したのには複雑な事情がある。

彼には叶えたい目的が二つあった。救済と復讐。

彼には助けたい女の子がいた。かつて彼が愛し、しかし決して結ばれることがなかった想い人の娘。その娘は犠牲になった。間桐臓硯と言うおぞましき吸血鬼……いや、悪魔と言うべき存在の。

雁夜はその臓硯とは血縁だった。対外的には父と子と言う立場。しかし実態は違う。

臓硯は二百年と言う長きにわかり生き続けてきた魔術師である。

だがその体はすでに人間の物ではない。魔術により作り上げた何十、何百と言う醜悪な蟲の塊であった。

臓硯はその蟲を使い、娘を蹂躪し凌辱した。幼い少女に耐えられる苦痛ではなかった。

感情は死に、その瞳には生きる活力さえ浮かぶことはなかった。彼女が心を閉ざした。そうしなければ壊れてしまうから。

雁夜はそんな少女　桜を見捨てることはできなかった。

だから彼は臓硯と取引した。聖杯を手に入れる。その暁には桜を解放しろと。

臓硯はそれを承諾した。尤も臓硯は雁夜が聖杯を手に入れられるとはこれっぽっちも考えていなかった。

間桐雁夜は落伍者だった。魔術師の才能は確かにあった。しかし彼は自らの系譜の魔術を嫌い、家を飛び出した。

ゆえに素養はあっても、魔術師としての実力は一切身につけていなかった。そんな人間が聖杯を手に入れるために参加してくる一流、超一流の魔術師たちと渡り合えるはずがなかった。

むろん雁夜もそんなことは百も承知だった。だからこそ、彼は自らまともな人間であることを捨てた。その身に臓硯の使役する魔術で作られおぞましき蟲を宿したのだ。

その苦痛は想像を絶する。発狂してしまえば楽だっただろう。死んでしまえば薬師むこともなかっただろう。

しかし雁夜は耐えた。耐えて耐えて耐え抜いた。その結果、寿命の大半を使いつぶし、残りわずかな、それこそ聖杯戦争が終結するまで持てばいいだけの命しか残らなかった。

だが雁夜は後悔していない。桜を救うことができるのならこの命などくれてやる。

また彼にはもう一つの目的があった。

それが復讐。桜の父である遠坂時臣への怒りと憎しみ。

雁夜が時臣を恨むのは桜をこんな地獄に放り込んだからだ。彼自身にはその気はなかっただろうし、こんな醜悪なことを娘にさせられ

るとは思っても見なかっただろう。

しかし彼が桜を間桐の養子に送り出さなければ、桜がこんな目に合うことはなかった。

そもも一つ理由が、時臣が最愛の人であった禅城葵……今は遠坂葵と名前を変えているが、その人を奪った男だからだ。

いや、奪ったというのは間違いだ。雁夜は何もできなかった。葵に思いを伝えることも、時臣と戦うこともしなかった。

ただ逃げていただけだ。嫌な思いをするのが嫌だったから。想いを告げても、拒絶されたと考え、結局何もしなかった。

雁夜は自分の人生を振り返る。いつも逃げてばかりだと。間桐から逃げ、葵から逃げ、何もかもから逃げていた。

けど、その結果がこれだ。後悔しか生まれない。ああ、自分はこうしてこうなのか。

蟲に凌辱される桜の姿を見た時、彼の中で何かが変わった。逃げるなど、彼の脳裏に声が聞こえた。

だから雁夜は今度こそ、逃げないと決意した。その結果が自らの死であっても……。

彼は一年と言う時間を耐え抜いた。絶えず体の中で蟲が暴れ狂い、発狂してしまいそんな苦痛が襲う毎日。食事をすることも、眠ることもままならない一年間。

普通の人間なら三日と待たずに発狂するか自殺するであろう痛みに、雁夜は一年も耐えたのだ。

そして今日はようやくこの一年の苦しみが少しだけ報われる。

「誓いをここに。我は常世全ての善となる者。我は常世全ての悪を敷く者」

召喚の儀式。詠唱を紡ぐ。

「されど汝はその眼を混沌に曇らせ待べるべし。汝、狂乱の檻に囚われし者」

臓硯の指示の下、召喚の詠唱に一節が付け加えられる。これは雁夜の能力が低いことから、サーヴァントの能力をある方法でランクアップさせるためだった。

召喚されるサーヴァントにはクラスが存在する。

セイバー、ランサー、アーチャーと呼ばれる剣の、槍、弓を扱う三騎士と呼ばれるクラス。

ライダーと呼ばれる騎乗に優れたクラス。

アサシンと呼ばれる暗殺を得意とするクラス。

キャスターと呼ばれる魔術を得意とするクラス。

そして雁夜が召喚しようとしているのは、バーサーカーと呼ばれる狂戦士のクラスだった。

バーサーカーとは狂化と言うスキルにより理性を奪い取り、無理やり能力値を上げるクラスだった。

臓硯がこのクラスを指定したのは理由がある。もちろん、雁夜のためなどでは決してない。

バーサーカーのクラスは燃費が悪いのだ。効率も何もなく、サーヴァントを使役するマスターから魔力を莫大に取り込み浪費する。

このため並みの魔術師ならその消費に耐えきれず早々に自滅してしまふという最悪のクラスなのだ。過去三回もバーサーカーのクラスを召喚した魔術師は、いずれも戦いの序盤で自滅して姿を消している。

臓硯はただ見たいだけなのだ。雁夜が悶え苦しむ姿を。詠唱を続け

る雁夜の後ろで臓硯は笑みを浮かべる。何も知らない、哀れな道化の姿をあざ笑うかのように。

しかしそれを知らない雁夜はただ勝つために、己の願いを叶えるために、桜を救うために詠唱を行う。

「我はその鎖を手繰るもの　汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

雁夜は詠唱を終える。同時に変化が現れる。彼の前の地面に描かれていた詠唱の際から光り輝いていた魔法陣が一層の光と魔力による暴風を巻き起こした。

彼はあるサーヴァントを召喚する。

それはまさしく狂った存在だった。

それはまさしく雁夜の心に答えた存在だった。

臓硯はサーヴァント召喚の際、一級存在を呼ぶためにある聖遺物を用意していた。サーヴァントとは過去の英雄の魂を呼び寄せるものの。

特定の存在を呼ぼうとすれば、それに縁のある品を媒介にすればいい。

臓硯が用意したのはかのアーサー王伝説にも名高い円卓の騎士の一人の聖遺物。それは超一級の英霊を呼ぶことで雁夜のキャパシティでは決して賄いきれない魔力を消費させ、より一層苦しむ姿を見るためであった。

しかし彼の思惑は外れる。彼が用意した聖遺物は何の意味も持たなかった。

それは聖遺物により招かれたのではない。雁夜の心により招かれた。

彼の心にある愛、哀と言った感情が、それを引き寄せた。

それはサーヴァントを呼ぶ聖杯がある意味、狂っていたからだろう。この聖杯戦争の聖杯は汚染させれていた。前回の第三次聖杯戦争によって。

ゆえにそれは無色の願望機としての役割を果たすことなく、ただ破壊を、破滅をもたらすただけに力を振るう壊れた存在になっていた。

だからこそ、奴が召喚された。次元を、世界を、理を、常識を、ルールを、何もかも蹴散らして、そいつはやってきた。

聖杯戦争に召喚されるのは英霊のみ。神と言うべき神霊は召喚されない。否、できないのだ。中には半神半人の英霊はいるが、純粹な神霊は呼び出せない。

しかし雁夜は召喚した。神霊を。狂った聖杯がそれと呼び寄せてしまった。

それは長きに渡り封印されていた。だが呼び声が聞こえた。自分を呼ぶ声が。愛を叫ぶ者の声が。

ゆえにそれは召喚に応じた。と言うよりも彼は無理やり自分から召喚された。

バーサーカーと言う枠に嵌りながらも、自らを失わず、自らの力を減衰させずに……。

そう……すべてに愛を届けるために！

「あなたに幸あれ」

その日、間桐の屋敷にいくつもの絶叫が木霊した。

聖杯戦争の幕が上がった。

倉庫街では激しい戦いが繰り広げられていた。

最良のサーヴァントと呼ばれるセイバーと槍を扱うランサーの戦い。激しい戦いは一人の乱入者によって中断することになる。

自らの真名を告げるはライダーこと征服王イスカンドル。

彼は高らかに宣言するとセイバーとランサーを勧誘する始末。むろん、二人とも相手にしない。その様子をライダーの隣にいたマスターであるウェイバーは何を考えてるんだと騒ぎ立てている。

とにかく、奇妙な空気が流れる中、さらにライダーは自分達以外にもこの戦いを見ている者がいると声高らかに彼をこの場に招きよせる発言をした。

「聖杯に招かれた英霊は今ここに集うがいい！　なおも顔見せを恥じるような臆病者は征服王イスカンドルの侮蔑を免れぬものと知れ！」

その挑発はこの戦いを覗き見していたすべてのサーヴァントとマスターに届いた。

この挑発に焦りを覚えたのはこの場にいない二人の男だった。アサシンのマスターである言峰綺礼とアーチャーのマスターである遠坂時臣。

彼らの懸念は当たった。

「我を指し置いて王を証する不埒者が一夜に二匹も沸くとはな」

倉庫街の街灯の上に姿を現すは黄金のサーヴァント。それは遠坂時臣のサーヴァントに他ならない。

彼はイスカンドルと会話とも言えぬ会話を行った後、自らの背後に

光り輝く別世界への門のような空間のゆがみを発生させた。そこから現れるのは武器。空間の中から現れた武器はその矛先を眼前にいるライダー達に向ける。

そんな様子を下水道の中から伺っていた雁夜は自らのバーサーカーに指示を出す。

ただ一言、投げやりに……。

「……やれ」

その時の彼の顔には紫色の巨大な何かのマークがついていた。

それは突然やってきた。どんと言う足音がした。自らを隠すことのない、雄々しき足音。

強大な桃色の魔力の光を放ち、それは彼らの前に現れる。

それは悪夢の象徴だった。それは恐怖の存在だった。それはある意味、あの間桐臓硯よりもなお、おぞましい存在だった。

それは二対四枚の羽根を持つ存在だった。それだけでも目立つが、そんなものはそれを語る要素の一つにすぎなかった。

なぜならそれは見る者の顔を引きつらせるほどに独特な姿、否、おぞましい姿だったのだ！

服装は半ば半裸だった。ハーフズボンと言えば聞こえはいいが、股間がはつきりと浮き出すピチピチタイプ。上半身は半ば裸。サスペンダーと肩周りとはびざ付近までは黒い服のようなものを身に着けているがそれ以外は肌が露出している。さらに尻の部分も露出している。尖った耳も印象的ではあるが、その顔は直視できない。ひげを

生やし、紫のルージュを唇に塗ったおっさん……。

「Love & Peace」。それが、わたしの、ポ、リ、シ、イ」

彼の名はハプシエル。福音を告げてしまうものと呼ばれる最恐最悪の存在だった。

「まあ、キュートな御嬢さん。それに素敵な人達？」

ハプシエルの姿を見た全員が硬直した。ウェイバーなどあまりのおぞましさに吐き気を催し、思いつきり口元を抑えている。恐怖が、今ここに始まる。

「ああっ、もうなんて素敵な子に、キュートな御嬢さんばかりなのかしら。吾輩、もう、たまんなあ」

筋肉を強調するポージングをしながら、不気味にくねくねと体を動かすハプシエル。まともな人間なら、間違いなく恐怖するだろう。

「……せ、征服王。あ、あれには声をかけないのか？」

声を引きつらせ、ランサーがかろうじて声を出す。

「いや、うん、まあ、その、なんだ……」

征服王もあまりの事態に何と言っているのかわからない。なおも物色するかのように視線を巡らせるハプシエルに、とうとうアーチャーがキレた。

「雑種！ 否、汚物が！ その姿、早々に消し去れ！」

展開していた二つの武器を空間から打ちだす。

それは先日遠坂邸においてアサシンを仕留めた攻撃だった。一撃でも直撃すれば致命傷を免れない。この一撃で勝負はついた。誰もがそう思った。

だが事態は予想斜め上を行った。武器が直撃し、爆発が起こる。

「あぁっ、あぁぁん」

どこか不気味な声が響く。煙がゆっくりとおさまると恍惚の表情をうかべた無傷のハプシエルが立っていた。

誰もが啞然とした。彼は何も難しいことはしていない。と言うよりも直撃したはずだ。それなのに彼は無傷。違う。彼に直撃する直前、薄い桃色の幕のような光にすべて防がれた。

「とつてもやさしい」

うれしそうにそんな言葉を漏らすハプシエルの態度が、アーチャーをさらに苛立たせる。

「この汚物がぁっ！」

アーチャーの背後がさらに光り輝く。そこから現れる新しい武器。数は十六。

「そんなバカな！」

ウェイバーの声に誰もが同意する。宝具とは英雄を象徴するものであり、原則として一人につき一つ。多くても三つ。だがアーチャー

はそれを数倍の十六も出現させた。

「消えろ！」

一世掃射。それが次々にハプシエルに直撃するが……。

「ああん。もつと。あつ、そこよ。iiiiiiiiっ！」

十六もの武器の直撃と爆発を受けてなお無傷。それどころか喜んでいる始末。

「くっ！ 貴様、どれだけ我を苛立たせれば気が済むっ！？」

「ああっ、なんて激しいアプローチ。吾輩、軽くイッてしまった！」

……

そう言うハプシエルはゆっくりと羽根をはたかせて浮かび上がる。

「痴れ者が！ よもや我と同じ視線に！ ええい！ 消えろ！」

連続で打ち出される武器だが、それはハプシエルに傷を与えるには至らない。それどころかさらに喜んでいる。

あつ、あつ、あつ、などと奇声を放っている。攻撃をもろとしないで近づいてくる相手に、さしものアーチャーも顔をひきつらせた。そしてその時はやってきた。

我慢の限界を迎えたのか、それまでとは打って変わって素早い動きをハプシエルは行った。距離が縮まり、がしりとアーチャーの体を抱きしめる。

「き、貴様！ は、放せ！」

じたばたと暴れるが、ハプシエルは離れない。それどころかハプシエルの顔がアーチャーの顔に近づいてくる。

「なっ、何をするつもりだ、貴様あつ！？」

「うっふーん。君に幸あれ」

「ま、まさか。や、やめろおおおつつ！」

ぶちゅー。

それは濃厚なベーゼ。アーチャーはなおも抵抗を続けようとじたばたともがくが、何もできない。次第にじたばたともがく手足に力がなくなっていく。

長い、長い時間が経過した。その間、ハプシエルのキスは続く。

チュパッ。

そんな音とともに終わりを告げたキス。アーチャーは意識を失い、ひくひくとけいれんを続けている。

地面に降りると、ハプシエルはアーチャーを放す。その顔にはくつきりと巨大なキスの形がついていた……。

そして……。

「……………あなたたちも素敵よ」

恐怖の夜はまだ続く。

【クラス】 バーサーカー

【マスター】 間桐雁夜

【真名】 ハプシエル

【性別】 男

【身長・体重】 ？

【属性】 混沌・善

【筋力】	A +	【魔力】	E X
------	-----	------	-----

【耐久】	E X	【幸運】	E X
------	-----	------	-----

【敏捷】	C	【宝具】	E X
------	---	------	-----

バーサーカー、襲来（後書き）

あとがき

F a t e / Z E R O とこの某漢女の小説に影響された。反省はしていない。でも後悔はしている。

と言うわけでハプシエル。あともう少しだけ続きます。

次の犠牲者が確定しているので。

次は誰が犠牲になるのかな……。

サーヴァント、散る（前書き）

調子に乗って続きました。

次の犠牲者は・・・

サーヴァント、散る

異様な光景だった。

それは聖杯戦争と言う闘争に参加し、世界の裏側たる魔術を扱う者達から見ても、異常と言うべき光景だった。いつたい何が起こったのか。

この光景を見ていたすべての者が抱く疑問。

突然出現した新たなサーヴァント。そのあまりにも異彩な姿に相手は何のサーヴァントであるかを考える余裕がなかった。

聖杯戦争に参加する七体のサーヴァントのうち、セイバー、ランサー、アーチャー、ライダー、アサシンはすでに存在が確認されている。

残っているサーヴァントはキャスターとバーサーカー。

しかしキャスターには思えない。明らかに魔術師と言う感じではない。ではバーサーカーか。これも考えにくい。なぜならバーサーカーのクラスには理性という物が存在しないのだから。

だがあの化け物は理性を保っている。いや、理性的かと言われれば甚だ疑問だが、理性は言葉を介する程度の理性がある。

それよりも、今、目の前の光景はどうだ。あのアーチャーが、アサシンを簡単に葬り去り、あまたの武器を、それもそのすべてが宝具と言う恐ろしいまでの破壊力を持った攻撃を誇る、黄金の王が、まるで何もできずに敗北した。

さらに恐ろしいのがその敗北の方法。一切の攻撃を受け付けず、アーチャーに接近し、彼の唇を奪った謎のサーヴァント。

ただの口づけ、接吻のはずなのに、あのアーチャーは意識を失った。ただたんにあまりのショックに意識を失っただけだが、死してなお英霊と言う位に昇華した存在を気絶させるなど異常としか言えない。

アーチャーの顔には紫色の巨大な唇の跡がくつきりについている。そして、その存在はアーチャーに興味をなくしたかのように、ゆっくりとほかの面々を見まわし……。

「……あなたたちも素敵よ」

この場にいる者たちには、それが死への宣告のように聞こえた。

（なんだ、あれは！？）

衛宮切嗣は手に握る狙撃用の銃のスコープから、そのサーヴァントの姿を観察しながら、汗を拭きあがらせていた。

彼自身、スコープ越しに見ただけでこれだけの冷や汗を出させる相手など、今までほとんどであつたことはない。

かの吸血鬼の頂点に君臨する死徒二十七祖に匹敵、否、それ以上の存在ではないかと戦慄する。

だが彼が戦慄したのはそれだけではない。サーヴァントとしてはあまりの規格外な防御には多少驚いたが、セイバーの宝具を知っている分、対処も可能と考えていた。

しかしアーチャーを倒した方法を見た瞬間、彼はあまりの存在の異常さに言葉を失った。ただの口づけでサーヴァントを行動不能にした！

シンプルだからこそ、恐ろしい攻撃……口撃か？ 魔力が込められていたわけではない。特殊な能力が付加されている様子もない。ただ口を合わせるだけ。それだけで敵を仕留めた！

『切嗣……』

イヤホンの向こうから、切嗣と同じようにこの状況を見ていたであろう仲間である久宇舞弥から指示を仰ぐような声が聞こえる。

「……今は様子見だ。アーチャーが倒れても、まだセイバー以外に二体のサーヴァントが残っている。アサシンも健在だ。それにあのサーヴァントがセイバー以外に標的を定めてくれれば手間が省ける」

切嗣は内心では動揺しながらも、この状況を己が有利に運ぶために利用しようと考えた。セイバーはランサーとの戦いで手傷を負っている。今の状況では明らかに不利だが、どうにもあのサーヴァントは全員を相手にしようとしている。

一対三ならば分があるし、まともな判断力のあるマスターならば、この場は共闘してあの不気味なサーヴァントを倒そうとするだろう。すでにアーチャーがなすすべなくやられたと言う結果を見せつけられているのだ。単独での撃破は難しいと判断してもおかしくはない。

（そうだ。これはある意味チャンスだ。ほかの二体のサーヴァントがあの手でサーヴァントに行動不能にされたところをセイバーに令呪を持って仕留めさせる。欲を言えばすぐにでもアーチャーを仕留めたいが、あのサーヴァントとの距離が近すぎる）

あの宝具を多数所有するアーチャーは今すぐにも仕留めたいが、今動けばセイバーを標的にされかねない。そんな危険なことではない。

（チャンスを待つんだ。きっとチャンスは来る！）

切嗣は己にそう言い聞かせ、謎のサーヴァントの監視を続けるのだった。

ランサーのマスターたるケイネス・エルメロイ・アーチボルトは、あとから出てきた謎のサーヴァントの能力を見て戦慄していた。能力を数値化して見たが、結果はあり得ないと言ったものだった。

ほとんどの項目がEX。なんだ、この化け物と言うのが正直な感想である。しかも障壁まで展開して隙がない。攻撃手段があのかすなのは救いか、はたまたまだなにか隠しているのか。知らず知らずのうちに汗がこぼれる。

最良のサーヴァントであるセイバーでさえも比較にすらならない。おそらくは歴代の聖杯戦争を合わせても最強のサーヴァントだろう。アーチャーを倒した様子からも考えて、単独での撃破は難しいか。

（いや、私とランサーならば可能だ）

ケイネスは冷静に戦術を組みあげる。俊敏性はランサーの方が圧倒的に上だ。捕まらなければどうと言うことはない。あの鈍足のサーヴァントでは決してライダーを捉えることはできない。

それにいかに強力な障壁を張っていようと、ランサーの宝具ならば突破はできる。

ランサーの持つ宝具、接触している物の魔力を打ち消す長槍「破魔の紅薔薇」^{ゲイ・ジャルク}。これならばあの障壁を突破できる。そこに令呪の援護を与えた決して治癒のできない傷を与える呪いの短槍「必滅の黄薔薇」^{ボウ}を叩き込む。

だからこそケイネスは命令を出す。
あのサーヴァントを撃破せよと。

ランサーのサーヴァントであるディルムッド・オディナは主からあの謎のサーヴァントを倒せとの命令を受けた。
それには何の異論もない。セイバーとの決着をつけたかったが、こんな状況では望む戦いはできない。それに主に命令は絶対だし、セイバーとの決着をつける前に邪魔者を排除するのは当然。

それに謎のサーヴァントやライダーと協力してセイバーを倒せと言う命令などよりも、よほどまともであり、反論することなど何もなかった。

同時に宝具の全力使用も認められた。これはありがたい。目の前の化け物はあのアーチャーの宝具の雨をもろともしなかった。宝具を使えなければまともに戦うこともできないだろう。

さらにとどめを刺す攻撃は令呪によりブーストさせると言われた。主にここまで気を使わせるとは騎士としては何としてもその忠義に報いなければならない。
すなわち、謎のサーヴァントの絶対撃破！

確かに登場当初は謎のサーヴァントの容姿と行動に悪寒を走らせたが、戦いの場にそんなものを持ち込む気はない。気持ちを切り替え、彼は槍を振るう。今の自分は騎士であり、主に勝利をささげる忠義の徒。

「はあああつ！」

ランサーは駆ける。謎のサーヴァントを倒すために。

「まあ可愛いほくろ。吾輩、感じすぎちゃう」

くねくねと不気味に動くが、ランサーは止まらない。直視したくない姿でも、すべては主のため、勝利のためと、己を叱咤し、意識を集中させる。

正面からは危険だ。それに相手は隙だらけなようで、実際隙だからけだが、先ほどのこともある。まずは速さでけん制してから渾身の一撃を放つべきだろう。

ランサーはその持前の俊敏さで攻撃を繰り返しながら、相手に必殺の一撃を与えるチャンスをつかがう。

「あつ、あつ、あああつ。もつとおおつ。いいいいい」

ランサーの連続攻撃も、ハプシエルの前では快感にしかならないのだろう。わかりきっていたことだ。あのアーチャーの宝具の投擲でも一切ダメージを与えられなかったのだ。

宝具の能力なしでは、こんなもの何の意味もないと。

そんな相手に軽く舌打ちしながらも、ランサーは何度も攻める。

「ああつ、もう、まってえ」

時折、ハプシエルがランサーを捕まえようと腕を伸ばし、抱きしめようと果敢に動くが、その程度の速さではランサーを捉えることはできない。

（やはりな。耐久力はかなりのものだが、速さがない。これでは俺を捕まえることはできない）

冷静に判断しながら、ランサーはハプシエルの追撃を逃れる。

「うふふふ。まってえ」

海辺で走る女性のような走り方でランサーを追うハプシエル。正直きもい。

「捕まえてみる」

挑発。ランサーは余裕を持って返す。

「うふ。もういじわるねえ」

対するハプシエルも余裕。その余裕の笑顔が先に崩れるのは……ランサーの方だった。

「うふううううう」

ハプシエルが紫色の魔力を全身に身にまとったかと思えば、次の瞬間、彼は左右に増殖した……。

て相手の三半規管を刺激し動きを止める。これがラブ・テンプテーション！

はっはっはっはっ

サーヴァントに三半規管があるかどうかとか、そんなのは関係ない！ ハプシエルは相手の常識を覆す。天使にも効いたのだ。サーヴァントに効かないはずがない！

そしてランサーを取り囲んでいたハプシエルがゆつくりとその輪を縮めていく。体中の筋肉と言う筋肉が小刻みに動いているハプシエル。なまじ半裸で半ケツなのだから、それはよく見えてしまう。

ランサーは迫りくるハプシエルの大群に恐怖を感じる。騎士として死の覚悟はしてきたし、今までも命のやり取りを繰り返してきた。死の間際でも恐怖を感じたことはほとんどなかった。それは戦士として当然のことであると受け入れていたから。

しかし今、ランサーは恐怖に顔をひきつらせ、己に迫る悪夢に顔を青ざめさせている。

もしセイバーと戦っている時の自分がこの場にいたなら、全力でその顔を殴っているだろうが、生前も、英霊となってからもこのような事態に遭遇したことはなかったがゆえに、致し方ないだろう。

距離は数十センチ。そしてその時はやってきた。

「あなたに幸あれ」

「！？！？！？！？！？！？！？！？！？」

声にならない悲鳴が倉庫街に木霊する。筋肉の波に揺られ、ひげをじよりじりと頬に当てられ、唇を幾度も奪われる。

英霊として、騎士として、男として、これほどの屈辱はあっただろ

うか。普通に犯されたり拷問されたりする方がマシと思われるほどに悲惨なものだった。

周りから見ればハプシエルと言う筋肉の壁にランサーが包まれているのだが、その中で行われているのは、悪魔の宴だった。

チーン

と言う音が聞こえてきた。

増殖したハプシエルが一人に戻ると、後にはぼろぼろになり、泡を吹き、顔中に紫色の口づけの跡を残した、見るに堪えないランサーの姿だった……。

「ら。ランサーあぁっ!？」

あまりの事態に隠れて様子をうかがっていたケイネスは絶叫を上げた。ランサーを心配してのものではなかったが、あまりのふがいなさで恐怖に叫ぶしかできなかった。

「あっ、あっ……」

そんなランサーの姿を見たウェイバーは恐怖で震えていた。これが聖杯戦争。なんて恐ろしい戦いなんだ。

簡単な、安易な気持ちで足を踏み入れていいものじゃなかった。僕には覚悟が足りなかった。

両手で自分の肩を抑え、みっともなくガクガクと震える。隣にいるライダーはこんな僕の姿を見てどう思うだろう。情けないと思うだろう。多分見損なっただろう。

だがそんなウェイバーの頭に大きな手が乗せられた。

「えっ、ライダー？」

「お前のその恐怖は当然と言えば当然だ。余だつてあれはちいっとなんて怖い」

そんなことを言うライダーにウェイバーは目を見開いた。この男がそんなことを言うなんて。

「に、逃げよう、ライダー！ あれはまともじゃない！」

「まあおおむね同意だが、余は逃げぬ。余は征服王！ 征服王に後退はない！」

しかし逃げようという意見は却下された。この男はあの光景を見てなお、逃げるのを良しとしないのだ。

「な、なに馬鹿なこと言ってるんだよ、馬鹿！ 言っただろ、あいつの能力を！ しかも増えるんだぞ！ 勝てっこないよ！」

あのアーチャーもランサーも倒されたんだぞ！ とウェイバーは声を張り上げる。

「しかしいつかは戦わなければならぬ相手。それにな坊主。逃げてばかりでは何も得ることはできんぞ」

征服王は笑いながら答える。だがウェイバーは見た。その征服王の手が、ほんの少しばかり震えているのを。

ライダーも怖いのだ。確かにあれは男としては嫌だ。けれども征服王はその恐怖すら乗り越え、否、征服してさらに進むことを選択したのだ。

自分とは違う。これが英霊。これが征服王イスカンダル。

だからこそ、自分も覚悟を決める。唇をギュツと噛みしめ、震える手を何とかもう片方の手で押さえる。

「……………わかった。けど約束しろよ、絶対勝つて！」

「おうよ！ お前にも見せてやろつ。余があのかけ物を征服する様を！」

ウェイバーとライダーは覚悟を決め、ハプシエルに戦いを挑む。

「せ、セイバー……………」

「大丈夫です、アイリスフィール。あなたは私が絶対に守ります。それに相手は男しか狙っていません。女のあなたならきっと大丈夫です」

恐怖に震える守るべき女性を気遣うように言うセイバー。だがセイバーもまた、ひどく動揺していた。

突然現れた謎のサーヴァント。その力は何の冗談だと思っただった。

アーチャー、ランサーを立て続けに撃破し、今度はライダーに戦いを挑もうとしていた。

いや、あれは戦いだっただろうか。しかし敗者はすべてを失った。命、と言うか、サーヴァントとしての死は迎えていないものの、それ以上の誇りを汚された。あれでは意識を取り戻したとしても、もう戦えないのではないのだろうか。少なくともトラウマにはなっていないそうだ。

実際、自分も恐怖を感じている。騎士として、王として、こんなにも絶望的な恐怖を感じたことはほとんどない。宝具を握る手に力がある。

何としてもアイリスフィールだけは守る。

セイバーは己にそう言い聞かせると、ライダーとハプシエルの方を見る。

恐怖の夜は、まだ明けそうにない。

サーヴァント、散る（後書き）

ランサーは犠牲になったのだ。

彼は再び立ち上がることができるのか！？

そして次回はzeroのヒロインであるウェイバーが魔の手に堕ち
るのか、それともライダーは守れるのか！？

セイバーとアイリの運命は！？

その時、切嗣の選択とは！？

次回、F a t e / z e r o

騎士王、散る。その思いは一体どこへ向かうのか……

ちなみにこれは嘘予告なので、あしからず

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7953y/>

Fate/Zero 最恐最悪のバーサーカー、襲来

2011年11月27日11時49分発行